

格差社会、貧困社会、無縁孤死社会…。豊かなはずの日本社会がどうしてここまで崩れてきたのだろうか。とりわけ深刻なのは足元から忍びよる経済問題である。1億総中流と言われたのは、もう昔の話だ。現在は一握りの勝ち組がいる一方で、貧困層は年を追うごとに増大し、年収200万円以下の人口はいまや1千万人を超えている。中間層もいつ貧困層に転落しないとは限らないのだ。その貧困層の最底辺をなすのがホームレスと呼ばれている人々である。

天理教の教祖は、社会の下積みになっている人々のことを「谷底」と表現し、谷底をせり上げて、世界を平らな地に均ならしたいと教えられた。ホームレスは現代の「谷底」の人々である。我々天理教者はこの問題にどう取り組むべきだろうか。その前に、まずホームレスとは何か、具体的に知る必要がある。問題の所在が分からないと「おたすけ」の手だても見えてこないだろうからである。

ホームレスは1990年代から問題が顕在化してきた。その定義もさまざまで、必ずしも野宿者と同義ではなく、ときにネットカフェ難民などの不安定居住者を含むことがある。不安定居住は不安定雇用から生まれ、また不安定雇用の多くは近年増えつつある非正規雇用から生み出される。ホームレスが中間層にとっても人ごとではないのは、非正規雇用者が全雇用者の4割近くを占めていることから容易に推測できる。

本書は、青木秀男(社会理論・動態研究所長)を中心とするホームレス研究会のメンバー9名による本格的なホームレス研究である。第I部「労働と歴史の空間」(第1章～第4章)、第II部「社会関係と意味世界」(第5章～第8章)の2部構成である。各部の巻末には、ホームレス問題を知るコラムが計6つ設けられている。

大阪・釜ヶ崎などを中心に、ホームレス問題の歴史と現状を紹介して論じる第I部もさることながら、天理教者のみならず広く宗教に関わる者にとって興味深いのは、支援の実際により踏み込んで論じる第II部であろう。ここでは、ホームレスの人々の成育歴や家庭環境を解説することで現代の家族規範の問題を問うたり(第5章)、3.3%とごく少数だが存在する女性ホームレスをジェンダー論の視座から取り上げたり(第6章)、ホームレスの宗教的信仰と宗教組織への帰属意識について考察したり(第7章)、支援者と被支援者とがともに当事者として協同する問題について論じたりで(第8章)、我々はこれらの章から多くの知見を得ることができるだろう。

ホームレスに対する心ない批判として、彼らは家庭を自ら捨てて自分勝手にやってきた挙句にそのような境遇に陥ったのだという自業自得(自己責任)論がある。しかし事実をよく知れば、もはやそんなことは言えないであろう。彼らの多くは、出発点から困難な家庭環境に育ち、学歴も低いまま不安定就労を繰り返し、自ら家族を作ったり維持したりするのが難しい状態に陥っているのである。そこに、安定した家庭が不在なのにもかかわらず、伝統的な家族イデオロギーに縛られ、心ならずも単身者となり野宿生活を余儀なくされている姿を垣間見ることができる。

ホームレス支援には現在、さまざまな宗教者が関わっている。その支援のあり方も、布教伝道を念頭に置かず社会的救済だけを行う動きと、明確にホームレス伝道を行う動きと、二通りのものがある。キリスト教救世軍による釜ヶ崎でのホームレス伝道を取り上げた第7章(担当:白波瀬達也)は、ホームレスの救済と伝道の相互関連や、入信する人々のメンタリティを知る上で、とても貴重な研究調査である。

釜ヶ崎ではお互いに出自や経歴を問わず、名前も通称で呼び合うことが多い。日雇労働の経験の長いホームレスほど、そうした“不関与規範”を内面化しているため、なかなか入信には至らないし、入信しても長続きしないという。

逆に、過去に比較的安定した社会的関係を有していた者は、親密な人間関係を求めて教会の“関与規範”を好意的に受けとめ、入信しても教会に定着する傾向が強い。彼らは自ら救世軍のボランティアスタッフになって、バザーや募金など教会の諸活動に携わっていくのである。

天理教において「社会だすけ」はどうあるべきか、また現場で生じる諸問題をどう理解し、受けとめたらよいか。本書は、現代の谷底社会としてのホームレス問題への取り組みを考える上で、数多くの有益な示唆を与えてくれるものである。

本書の主な目次は次の通り。

第I部「労働と歴史の空間」

- 第1章 排除する近代—大正期広島の乞食世界
- 第2章 寄せ場「釜ヶ崎」の生産過程にみる空間の政治—「場所の構築」と「制度的実践」の視点から
- 第3章 飯場労働者における「勤勉」と「怠け」—労働者の選別と排除のメカニズム
- 第4章 放置された不安定就労の拡大とホームレス問題—寄せ場の日雇労働者を野宿生活に追い込んだ要因

第II部「社会関係と意味世界」

- 第5章 家族規範とホームレス—扶助か桎梏か
- 第6章 ジェンダー化された排除の過程—女性ホームレスという問題
- 第7章 教会に集う野宿者の意味世界—釜ヶ崎における救世軍の活動を事例に
- 第8章 野宿者と支援者の協同—「見守り」の懊悩の超克に向けて

